

氏名	三枝 守隆
学位の種類	博士 (比較文明学)
報告番号	甲第388号
学位授与年月日	2015年3月31日
学位授与の要件	学位規則(昭和28年4月1日文部省令第9号) 第4条第1項該当
学位論文題目	アーノルド・J・トインビーの「文明の解体」の新解釈 ——哲学的解釈学に依拠して
審査委員	(主査) 佐々木 一也 林 文孝 阿部 珠理 (本学大学院社会学研究科教授)

I. 論文の内容の要旨

(1) 論文の構成

当該論文は、3部16章173節53葉の図表からなる。節以下は主なもののみで、章立てを示す。

第1部 『歴史の研究』の理解はいかにして可能か

第1章 この論文の学術的表現

第2章 哲学的解釈学の成立と日本における研究

第3章 哲学的解釈学の諸テーゼ

第1節 ディアレクティク

4 解釈学的弁証法概念 —— 「答え」の性質による概念規定

第2節 テキストにおける解釈学的弁証法

3 真理請求——レクチオ・ディヴィナを手掛かりにその概念を把握する

第4章 まとめ

第2部 「文明の解体」のテキストはどのような問いに対する答えとして現前しているのか

第1章 『歴史の研究』の文献解題

第2章 『歴史の研究』、縮刷版、それぞれの和訳のテキストの性質

第3章 『歴史の研究』における自己言及性

第4章 解釈学的レジユメの書き方 —— 自己評価と完訳版の訳語の尊重

第5章 「文明の解体」の解釈学的レジユメ（見出しは申請者が作成）

C. 文明の解体の過程

I. 解体の基準

(c) 社会体の分裂

(d) 魂における分裂

第6章 まとめ

第3部 諸文明の比較研究の理論

第1章 要約と理論の性質

第1節 要約の性質

2 テキストと要約者とあいだの解釈学的弁証法の非顕在化

第2節 理論の性質

3 再構築される理論における解釈学的先入見と理論的枠組み

第2章 理論構築のための作品

第3章 Comparative study of civilizations の成立と日本における受容

第4章 諸文明の比較研究の理論の枠組み

第5章 諸文明の比較研究の理論のテーゼ

第6章 時代区分の第3のカテゴリーにおいて導き出されるテーゼ

第5節 解体に向かう文明に生きる人間における「魂の分裂」のテーゼ

1 魂の分裂と精神の分裂

2 仮説 —— 生の表出の様式としての魂の分裂の様式

3 仮説の検証 —— プラトンの『饗宴』における放縦

第8節 文明間の邂逅のテーゼ

第9節 歴史の法則のテーゼ

2 文明論と文明評論の位置づけ

まとめ —— 歴史的理性

(2) 論文の内容要旨

トインビーの長大で不統一と言われるテキストを一貫して読み解くために、その方法論として申請者は哲学的解釈学を採用する。そのうえで中心部分の内容要旨を抽出し、それに基づきトインビーの歴史叙述に見られる普遍的テーゼを明確にする。

第1部では、H・G.ガダマーの『真理と方法』の哲学的解釈学が検討される。それは「解釈学的循環」をすべての理解の基礎に置く考え方である。テキスト解釈(理解)は部分と全体とが言語を媒介として相互に規定し合って進められてゆく、終わりのない弁証法的過程である。これにはテキスト成立に際しての「問い」の「答え=テキスト記述」に対する先行性が関わる。解釈者はこれを想定することで解釈学的循環に参入することができる。また、解釈学理論では解釈されようとしているテキストは「真理請求(Wahrheitsanspruch)」を持つとされる。解釈学的循環に参入して真理請求を引き受けることで、神話的記述を含んだ『歴史の研究』の深層が、解釈者の主観のみによる独善的でない仕方で表層に現れ出る。すなわち、テキスト解釈において作者と解釈者の対話がなされ、作者の深層の意図を引き受けた上でトインビーの歴史観の理解が成立することが明らかになった。

第2部では、上記理論に基づいて『歴史の研究』から作者の深層に迫る問いと答えの形式による要約が作成される。錯綜したトインビーのテキストから一貫した意味を解釈するためには、内容要旨の把握が不可欠である。だが先行研究は『歴史の研究』全体を十分に踏まえていない。それゆえ申請者は全巻を改めて読み返しつつ、現存要約版の検討の結果、それらには恣意的な内容の取捨があることが判明した。解釈学的観点から『歴史の研究』全巻の内容を再構成する試みを行った申請者は、第5巻の「文明の解体」が全体を理解するための核心部分とする仮説を立てる。そして第1部で検討された理論に基づき解釈学的レジュメを提示する。

対話篇の形式をとるそのレジュメによると、文明の成長は多様だが、文明の解体は画一的過程で起こる。それは「社会体の分裂」と「個人の魂の分裂」に分かれる。前者は「少数的支配者」「内的プロレタリアート」「外的プロレタリアート」の三者間での葛藤が原因である。この三者の中から「創造的少数者」が現れ文明の再生を行い、解体を阻止する過程が生じる。この過程をヘレニック、ロシア、メソポタミア、アラブ、インド、中国、日本などの例を次々に挙げて語る。後者「魂の分裂」は、個人の精神的活動の二者択一しか許されない状況が原因である。その択一は放恣と自由、脱落と殉教、偶然崇拜と必然崇拜、復古主義と未来主義、など6つの対である。これらが対立し葛藤することで文明は解体してゆくとされる。これも多様な文明について検討する。従来の要約版では顧みられなかったテキストの補論部分も要約される。最後に原典完全翻訳版と要約版と解釈学的レジュメの相互比較および内容上の新しい気付きについての指摘があって第2部は終わる。

第3部では、解釈学の方法と弁証法的運動として描かれたトインビーの「文明の解体」論レジュメから、トインビー独自の歴史理論につながる普遍的テーゼを導き出す。申請者によればテーゼは170ほど抽出可能である。それらは4種に昇華分類される。①外界との境界の観点から、闘、境界。②文明の要素の観点から、挑戦と応戦、支配的少数者と内的および外的プロレタリアート。③文明を動かす自由と因果性の観点から、成長期の自由、解体期の画一性と因果性。④文明の必然的原因の有無の観点から、「実在(the Reality)」、宗教的直観の重要性。以上である。トインビーは文明を「人々を差別する階級が実在する社会」と定義する。それゆえ解体する文明には共通性があり、時代と地域を超えた文明の等価性と同時代性という理論につながる。文明は挑戦に対して応戦するが、成長期を終えると社会が階級分裂し、個人の魂も分裂して文明が解体する過程は共通なのである。申請者が重視するのは「魂の分裂」であり、その具体的過程をトインビーの多様な文明事例に沿って検証を重ね、その理論の中核とみるに至る。

トインビーと異なる歴史的経緯を持つ我々の歴史理解の立ち位置から、申請者はトインビーの普遍的テーゼが理解可能であることを解釈学的なテキストとの対話の実践の中で自覚する。最終的にトインビーと我々を取り巻く歴史の現実との対話の間で、歴史観の動的な存在性格に到達する。

II. 論文審査の結果の要旨

本論文は以下の諸点において高く評価される。

第一に、申請者が人生をかけた永年の研究による成果であり、学会において忘れられている感のあるトインビー『歴史の研究』を、そのすべてにわたって目を通し、原典に当たり、検討している点である。並みいる先行研究のテキスト読解に関する不備を克服して詳細に検討し、トインビー自身の歴史論に即した新解釈を提示することに成功している。本論文執筆以前に、『歴史の研究』全巻を対話篇形式にて整理した詳細なレジュメを作成しており、それが本論文の下敷きになっている。

第二に、哲学的解釈学という方法を用いている点である。申請者がトインビーのテキストから切り出してきたテーゼによれば、「文明が部分としては認識できない。」「文明に属している人間は自分の属している文明を認識できない。」これらは文明論の自己言及的性格を主張しており、トインビーの解釈学への親和性を示している。単純な類型論に過ぎない、強引な精神論的解釈に墮している、詩や神話を引き合いに出すことから非合理的直観に頼っている、などとも言われてきたトインビーだが、そのテキストに永年取り組んできた申請者は、それを客観的に祖述することに意味を見出せず、解釈学的循環に自覚的に参入する道を選んだ。そのことによって一見茫漠としたトインビーの叙述から明確な筋道を見出すことに成功した。これはトインビー解釈として日本において初めての試みである。これによってヨーロッパのトインビーと日本の解釈者との関係が自覚され、申請者は比較文明学研究に新しい可能性を拓いた。

第三に、日本における先行研究がトインビーの一面を捉えてそれを拡大して論じているのに対して、本論文はトインビーのテキストそのものが語りかけてくる内容を捉えようとする姿勢を持っている点である。文明の形態論として、ジャーナリスティックな文明論として、市民運動の拠りどころとして、あるいはその宗教性や文明批判論との関係で特定の宗教に引きつけて解釈されたりして、トインビーはその一面だけで扱われてきた。本論文はトインビーのテキストそのものから核心となる理論を切り出そうとする試みだと評価できる。

第四に、トインビーの歴史論の中核が「文明の解体」論にあるとする仮説が、多くのテキスト上の傍証によって説得力を持って検証されている点である。申請者が切り出した「文明には常に挑戦がなされ、それに対する応戦が行われる」というテーゼ、「文明が境界を持つことから必然的に社会の分裂と個人の魂の分裂が引き起こされる」というテーゼによって、文明は必然的に解体に向かうという法則が、単なる精神論でなく、文明のメカニズムとして解明されている。

第五に、膨大かつ複雑な構造を持つ『歴史の研究』を整理し、「文明の解体」論という理解の骨組みを提示できたという点である。グランドセオリーが顧みられなくなっているポストモダンの現代にあって、「未決の問いで終わる一貫した方向への問いと答えの循環の連鎖」の先に全体論的観点にもつながる大きな見通しを立てたことは、解釈学という方法を用いたトインビーの新たな比較文明学的研究となった。

以上はすべて本論文の特徴およびそれに対する評価である。

解釈学導入の動機のひとつでもあった学術言語と日常言語の関係が詰めきれなかった点や、それに伴って本論文の記述の用語法に揺れが出ているなどの課題は残っているものの、この生涯をかけた永年の研究の総括ともいえる本論文は、それらの欠点を補って余りある多くの新しい知見と研究方向性を拓いたと言える。

以上により、本論文は博士学位に十分に値するものと評価される。